

オランダ通詞と英語

植村 榮

幕末の1853年7月にペリー提督が率いる軍艦4隻からなる米国の黒船艦隊が江戸湾入り口浦賀沖に来航し、それまで長年にわたって鎖国を守ってきた我が国に開国を迫ったことはよく知られている。そのときの幕府の慌てぶりは狂歌「泰平の眠りを覚ます上喜撰たった四杯で夜も寝られず」に集約されている。ここにある上喜撰とは宇治の高級緑茶のことだが、蒸気船の掛詞であり、そこに含まれるカフェイン（本誌2021, 74, 49 参照）の強い覚醒作用のために4杯（4隻と掛けて）飲んで眠れないというわけである。交渉の結果、翌1854年2月にペリーは再度やってきて3月に日米和親条約を結ぶに至ったのだが、これらの交渉を何語で行っていたのだろうか。

中学・高校の社会科・日本史の時間にはこの点について習ったことも、また考えたこともなかったが、実はすべてオランダ語であったということを、少し以前に長崎を散策中に恥ずかしながら初めて知ったのである。ペリーらは当然英語しか話さないだろうし、幕府側としては当時外国折衝を行うには長崎奉行の下におかれたオランダ通詞が働く以外はないのだが、当時のオランダ通詞は英語をほとんど解せず、この場合は米国側にポートマンというオランダ生まれの通訳官が雇われていてオランダ語を通して交渉を行ったのが実情である。米国側は日本の事情にかなり通じており、前もってオランダ語を話せる人物を用意してきたのである。同じく1854年のロシアの提督プチャーチンとの交渉も言語はすべてオランダ通詞を通してのオランダ語であった。鎖国して以来西洋との接触は長崎出島でオランダとのみであったことから考えるとこれは当然のことで、蘭学を学びに全国から長崎に集まった俊英たちも読み書き話しすべてオランダ語であった。例えば、宇田川榕菴が我が国最初の化学書「舎密開宗」（認定化学遺産第001号、第029号）を著した際に用いた底本は、英語で書かれた原本がドイツ語に訳され、さらにオランダ語に訳された書であることからよくわかる。

数多くいたオランダ通詞の中に森山栄之助(1820~1871)という、オランダ人も驚くほど流暢なオランダ語を話す人物がおり、英語も少しは理解し話せたというが、その理由はこうである。1848年、日本に行きたいという強い意思をもって北海道利尻島に漂着・密入国した米国人ラナルド・マクドナルド(1824~1894)が拘束されて長崎に送られ、その取り調べに主に当たったのが森山であった。長崎を退去



長崎市諏訪神社下にあるマクドナルドと森山栄之助の顕彰碑
(小野寺 玄氏撮影)

させられるまでの約7ヵ月足らずの間に彼から英(米)会話を習い、これが我が国の英語教育の基礎となったと考えてよい。この辺りの事情は吉村 昭(1927~2006)の小説「海の祭礼」(文芸春秋社、1986年刊)に詳しい。森山はペリーの第1回目の来訪のときの交渉には間に合わなかったが、第2回目にはオランダ語での通詞として活躍している。そのときに発音に妙な訛りはあるものの、かなり巧みな英語を話すことに艦隊の士官たちが驚いたとある。1856年に下田に米国領事館ができ総領事のハリスやその秘書兼通訳官ヒュースケンらと接触するうちに彼らから英語を習い自由に会話ができるほどに上達、その後江戸で福地源一郎(桜痴とも。新聞記者・劇作家)や津田 仙(西洋農学の先駆者。津田塾大の創始者で新5000円紙幣の津田梅子の父)らに英語を教えたのである。

もう1人、オランダ通詞の中で挙げておくべき人物は森山より少し年下の堀 達之助(1823~1894)である。彼は日本初の本格的な英和辞書「^{あんげりあ}暗厄利亞語林大成」(1808年の英国軍艦フェートン号事件を受けて1814年に長崎で完成)を用いて長崎で独学で英語を学んでいたが、第1回目のペリー来航のときには「I can speak Dutch」以外の英語はほとんど通じず、オランダ語の通訳ならびに翻訳者として働いた。不幸にも1855年から4年間以上も投獄されたが、おそらくその語学力を買われて1862年に江戸の^{ばんしよしらべしよ}蕃所調所から出版された日本初の本格的英和辞典「英和对訳^{しゅうちん}袖珍辞書」の編纂に大きく貢献、その後北海道箱館奉行所で英語通詞の育成に努めている。彼の生涯についてはこれも吉村 昭の小説「黒船」(中央公論社、1991年刊)に詳しい。

このようにして幕末から新生日本に向けて、オランダ語から英語の世界へと、一筋縄では行かないものの、まずはオランダ通詞たちの苦勞と努力の下で移行していったのである。

うえむら・さかえ
京都大学名誉教授・日本化学会フェロー/化学遺産委員会顧問